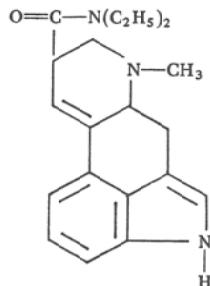


<アメリカ研究A レポート>

LSDとヒッピーの因果関係

96E040 小池 豊

—LSD(リゼルグ酸ジエチルアミド)—それは、1938年にアルバート・ホフマン博士 (Albert Hofmann) によって世界ではじめて合成されたものである。彼はそのとき、スイスのバーゼルにあるサンドス製薬研究所で薬用アルカロイドにたくさん含まれているライ麦菌、麦角菌の化学的薬学的特性について調べていた。同時に彼は、血液の循環に刺激をあたえる蘇生剤の合成薬も調べており、LSDは麦角菌の派生物から合成したものとしては二十五番目にあたっていた。それでLSD25と名づけられた。しかし、初期の研究段階では動物実験でどうということもなかつたので、サンドス製薬研究所の研究者たちはすぐに興味をなくしてしまっていた。



それから5年後の1943年4月16日、ホフマン博士は偶然、指先からほんの少量のLSDを吸収してしまった。彼は思いがけなくLSDの不思議な世界にはいりこみ、「パッド・トリップ」を経験することとなった。これ以後、LSDは社会的文化的影響力を發揮し、1960年代に爆発的に台頭したドラッグ・カウンターカルチャー（対抗文化）の草の根的な存在となつていった。

「ヒッピー」「フラワー・チルドレン」などと呼ばれるこの新たなグループは、平和、自由な愛、非物質主義を標榜した。彼らはビーズなどで飾ったゆったりしたカジュアルな服装を身につけ、これ見よがしに髪を伸ばし、物を共同で所有するライフスタイルにこり、LSDのような気分転換のためのサイケデリック・ドラッグをごくふつうに使用した。サイケデリック体験は、共同体全体を統一する共通意識のきずなであった。そして、すべてがドラッグを中心に回転していった。

サイケデリックを大規模に使用する下地ができたのは、ビート世代が構成していた社会的・芸術的周辺層においてであった。LSDが巷で使用されはじめる数年前から、サイケデリックで人生が変わった者たちの数は徐々にめだちはじめ、ついには東西両海岸で自分たちだけの共同体を形成するまでになっていた。新しいサイケデリック・ライフスタイルがいちばんめだったのは、サンフランシスコのヘイト=アシュベリー地区であった。LSDをエネルギー源にする文化反乱がまことに鮮烈かつ強烈なかたちで起こり、ついには世界中の目をひきつけたのは、このヘイト=アシュベリーにおいてであった。

この地区は1960年代初頭には反体制派の避難所になっていた。そのころヘイト=アシュベリーとは正反対のサンフランシスコのノース・ビーチには、ビートニクたちが住みついていたが、彼らを見物に観光客が押し寄せ、またギャングや麻薬捜査官、そしてスリルを求めるだけの連中も、ビートニクのまわりに集まってきたため、相当の数のビートニクたちがそういった連中にわざらわされるのを嫌って、ヘイト=アシュベリーへ移住していた。1965年までには、ヘイト=アシュベリーはネオボヘミアンたちの飛び領土として活気にあふれ、大規模な過渡期の最先端に位置する共同体になつていていた。そこに住みついた若者たちは、朝9時から夕方5時まで

日課に支配されて働くストレートな一般人とはまるでちがった法則とリズムに固執し、新たに登場したヒッピーたちは、先輩のビートニクたちの多くが基盤にしていた疎外と絶望のシンドロームをなげすて、全体のトーンを孤独から共生へ、個別主義から対人関係へと移行させていった。この新しい感受性は、ヒッピーたちが音楽を好んだ点によくあらわれ、仲間のうちで好まれる曲はもはやフォークやジャズではなく、飛び跳ねるようなロックンロールのリズムに変わっていた。

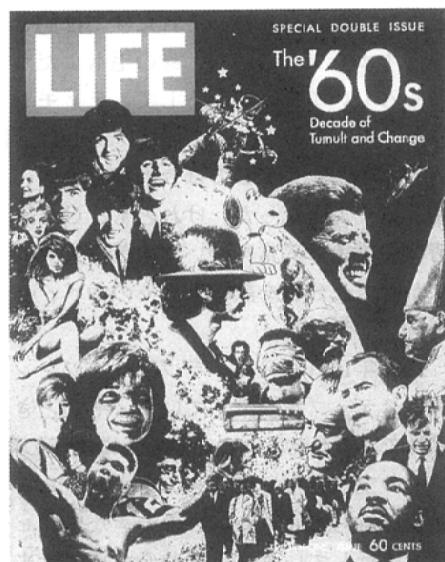
ヘイト=アシュベリーではハプニング的に行われるコンサートが文化復興の要になり、それが新しい共同体意識を生みだす核となっていた。1966年1月、ケン・キージーとメリー・ブランクスターズが主催した「トリップス・フェスティヴァル」は、ヘイト=アシュベリーのヒッピーたち全体にアドレナリン的效果を及ぼし、ドラッグ常用者（ヘッド）の数を増加させ、地元バンドを次々に結成させる要因となった。これらのバンドはフォークとブルースに根ざしていたが、LSDと生なエレキのパワーの影響でリズムが一変していた。これらのサンフランシスコ・サウンドは「アシッド・ロック」と呼ばれ、ジャンルとしてばかりでなく営業形態の面でもユニークであった。

アシッド・ロックの祝祭はコンサートホールばかりでなく、街頭にもあふれだし、ヘイト=アシュベリーの日常生活の要になっていた。街路そのものが中心舞台となり、若者たちはその舞台で、好きなように歩き回り、好きなようにしゃべり、気が向いた衣装を身につけていた。彼らはつねに派手なコスチューム、自然発生的な演劇、いろいろどりの道化、あちこちながら歩くミントストレル・ショーなど、いくたの刺激がパレードのようなものを展開させた。若者たちはポーズだけでそうしているのではなく、奇怪な衣装で街路をねりあるくことによって、権力に抵抗し、金を払って「体制」に入り込むことを断固拒否する姿勢を示していた。しかしそれだけではなく、長髪、ビーズのかざり、はだしといいでたちで日々街路を歩き回りながら、たがいに笑顔をかわす彼らにとって、そういういでたちは単なる疎外のシンボルであるばかりでなく、積極的な意識の飛躍、個人と社会のまるで異なる優先事項をドッキングさせあう行為そのものを象徴していた。

ヘイト=アシュベリーの住人たちは、なんとなくできあがった仲間だけで雑居し、私有物を最小限にしぼった共生生活を実践した。一夫一婦制はしばしば拒否され、グループ結婚が普及した。性道徳の緩和は、共通の精神性を求める欲求がますます強まってきたことのあらわれであった。

LSDを大量に生産し、若者文化にドラッグの火をつけた違法取引の王者オーガスタス・アウズリー・スタンリー三世によって、ヘイト=アシュベリーはアシッドがはじめて大量販売された、世界最初のサイケデリック・スーパー・マーケットとなった。そして、LSD崇拜者が全国から大量にドラッグを買いつけに押し寄せ、たちまち途方もない規模に拡大した。

しかし、このころには、警察とヒッピーたちの間は相当緊張していた。マリファナの取り締



まりはいっそう厳しくなり、カリフォルニア州議会はLSDの使用を禁じる条例を通過させたばかりであった。そしてこの新しい条例は1966年10月6日から施行されることになっていた。けれども、『オラクル（サイケデリック・タブロイド）』グループは当局と厳しい対立を繰り広げるのは気が進まず、新条例に抗議するかわりに、彼らは法体制の虚偽性をあばくお祭りさわぎを主催することにした。そして、LSDが禁止された日、『オラクル』は「ラヴ・ペイジエント・ラリー」という戸外集会を催し、数千名がゴールデン・ゲート・パーク隣りのパンハンドル公園に集まり、LSDに対して不变の献身を捧げることを表明した。

1966年4月には、サンドス製薬は、自社製品のLSDすべての回収に踏み切らざるをえなくなっていた。おかげで、アメリカ国内では政府関係機関が後押ししていた研究まで、そのほとんどが一頓挫をきたさなければならなかった。LSDさわぎに乗じてベトナム戦争に反対を唱える人間を暗に攻撃する好機到来とばかりに、政治家たちはこそって、このLSDというドラッグに対する反対声明を出した。また、LSDは各マスコミからも社会の敵ナンバーワンの称号をたてまつられ、マスコミがLSDには一生続く狂気をもたらす可能性があるという、間違った情報を流したこと、アメリカ全土がサイケデリック・ドラッグへの恐怖におののくこととなった。さらに、それだけでは飽きたらず、足が何本もあるお化けのような赤ん坊を産み落とすカップルという、身の毛もよだつようなイメージを登場させた。しかし、新聞が伝えるおそろしいイメージ、そして、ティモシー・リアリーたちの歓喜に満ちた賞賛、この両極端に分かれたLSDについてのイメージは、国論を分断した。そして、こわいものみたさがぐいぐいと人の心をLSDのほうへひきつけ、その結果、このドラッグを試してみようとする人数は増える一方となった。けれども、CIAと軍はさらに共謀して、LSDについてのあやまつた情報や染色体異常についての話を大々的にながすことによって、1960年代終わりと70年代初めにかけてLSDを試した人々の中へ、LSDについての否定的なイメージを、総合的な規模でインプットした。

1966年10月6日の「ラヴ・ペイジエント・ラリー」のあと、『オラクル』のメンバーたちが次のステップを模索していた。そのとき、ジョン・スター・クックからこの地球という惑星を感動でふるわせる、この世ならぬ次元の精神世界のひとときをつくり、ヘイト地区こそがイヴェントの主役となったとき、本当の「ヒューマン・ビー=イン」となる「ヒッピー族の集い」の提案が持ち出された。このつぎなる「ビー=イン」の第一目的は解放のための活動を別々の次元で実行している文化的革命をめざす者（ヒッピー）と、政治的改革をめざす者（政治的過激派）の、この二者をひとつにまとめること、つまり、左寄りの過激派たちをLSDに帰依させようということであった。

1967年1月14日、二万五千人を超す男と女、それに子供たちをまじえた群衆が、ゴールデン・ゲート・パークの中にあるボロ競技場の広い芝生のはずれに設けられた仮設ステージを囲んで寄り集まっていた。この「ビー=イン」は、ときの政府、あるいは何か特別の法令、政策に異を唱えるために催されたものではなく、二万以上の人間が、何という目的もなくただ集まっていた。そしてそこに集まってきた人々は芝生の上に座り込み、食べ物やワインを分け合い、そこに平和の気分が満ちあふれ正在ことにおどろき、LSDが愛と平和のドラッグであるという認識をさらに巨大に膨らませた。しかし、この「ビー=イン」の最終目的とした、政治的過激派とサイケデリック・グループの象徴的にせよ統一感を引き出すことは失敗に終わり、両者がいかにくいちがった存在であるかを、改めてくっきりと浮き上がらせる結果となった。そ

して、これは当然の結果であった。意識拡大を体験する人口が充分な数に達しあえすれば、世の中は完全に変わることができる。これが、ヒッピーたち、ドロップアウトら、そしてそのほか LSD サブカルチャーに浸っていた者たちの概念だった。政治的行動し、その働きかけによって社会を変えていくという考えは、全くヒッピーたちの受け入れないものだった。それどころか彼らが積極的に選んでいたのは、政治にはまったく関わらないでいこうとするライフスタイルであった。

「ビーコン」以来、ヘイト＝アシュベリー地区は、マスコミ攻勢の台風の目となつた。記者たちが世界中から押し寄せ、たちまちのうちにヘイト＝アシュベリーは、アメリカで最も注目を浴びる地区となった。ほとんどのマスコミがヒッピー・コミュニティの記事を鏡ってとりあげ、ヘイト＝アシュベリー地区の新規なライフスタイル、そしてそれに関するもうもろをひくくるめて、『サンフランシスコ・クロニクル』紙のコラムニスト、ハーブ・ケインが、「ヒッピー」という名前をたてまつった。「フラワー・チルドレン」、「ラヴ・ジェネレーション」などの新造語がマスコミからくりだされ、定着した。

そして、一般に見られたヒッピーのイメージは二つに分かれた。フラワーチルドレン、それはまつとうな市民社会の約束事を粉碎しようとする人間。そしてもう一つは、人畜無害の道化役者の群れであった。いずれにせよ、ヒッピーは親があんな人間になつてはいけませんよ、と子供たちに教えるような人間であり、その否定的なイメージが国民の先入観となつていった。

ヘイト地区は、マスコミが報じるものを探めて、人々がまるで磁石のように吸いよせられでもするかのように集まる場所となつた。郊外から、サタディ・ナイト・フィーヴァー的スリルを味わいに、年端もいかない少女たち、そして、「プラスティック・ヒッピー・（ヒッピー気取り）」たちが、このヒッピーの中心地に押し寄せた。「愛の夏（サマー・オブ・ラブ）」といわれたこの頃には、ヘイト＝アシュベリー地区は、すでにパラダイスとはとてもいえない状態になつていていた。あの LSD の栄光の時代は、すでに思い出の日々になつてしまい、それとともに、かつてはこのヒッピーコミュニティの屋台骨だったあのパイオニア・スピリットのほうもすがたを消していた。街路での生活はすべてに、とげとげしさがまし、その感触に耐えきれない多くの者は、結局この町を去つてはいった。

さらに、ヘイト地区がギャング、暴走族、浮浪者、ペテン師、落伍者、そして精神に異常をきたしてうろつきまわるもの、そんな人間たちの巣窟となるにつれ、ここで暴力沙汰も飛躍



1967年1月ゴールデン・ゲート・パークで行われた最初のビーコン



ヘイト＝アシュベリーでのディガーズの街頭演劇
Hippies in costume performing street theater in Haight-Ashbury.

的に多くなり、町中にドラッグがあふれ、しかもどのドラッグを使うかによって精神のバランスも様々になっていった。

「サマー・オブ・ラヴ」のこのころ、ここでドラッグの雄として競っていたのは、覚醒剤（スピード）、マリファナ、そしてLSDの三つだった。あるとき、マリファナの品不足という事態が起こった。そして、増え始めていた覚醒剤の使用によって、人々の間に食欲減退からくる栄養失調が広まり、肝炎や使用済みの注射針とフリーセックスが原因のVD（梅毒）といった伝染性の病気がはやりだした。さらに、「ビー＝イン」以来のマスコミの大騒ぎで、ヘイト地区のドラッグには背徳の科学者たちが関わりはじめ、マフィアも独自の製造元と販売ネットワークで乗り込んできていた。その結果、STPと呼ばれるスーパー幻覚剤（これを飲むと人は三日間も自昼夢からさめることができない）のような、正体不明の奇々怪々なケミカル群のドラッグが出まわり、LSD被害者たちの増加が広がるいっぽうとなった。それにつれて、ヘイト地区は弱肉強食のトリップしかできない場所となり、落ちるところまで落ちていった。

LSDにのめり込みすぎ、LSDなしではすまされなくなったLSD帰依者の多くが、郊外へとのがれでていくようになった。彼らは、カリフォルニアやテキサスなどの、その頃多く生まれつつあったコミュニーンのどこかへはいっていった。または、これからヒッピー・コミュニティが根づこうとしあげている町へながれていった者もいた。ヒッピーたちはヘイト地区から離れていった。

1967年10月、ディガーズ（演劇集団サンフランシスコ・マイム・トループからたもとをわかった俳優グループで、ドロップ・アウトすること対政治的関与を論点とするグループ）によって、ヒッピーを象徴とするアクセサリー、ビーズ、バンダナ、そして、アングラ新聞、そんなもので飾られた棺が通りをしづしづと運ばれ、安置された。そして、シンボリックな葬儀を演出することによって、『ヒッピー』ということばが葬り去られ、『ヒッピー』の死を印象づけた。

『ヒッピー』はLSDまたはその他のドラッグと共にこの世に誕生し、60年代、ヘイト=アシュベリーを中心に大輪の花を咲かせた。そしてまた、ドラッグによって『ヒッピー』たちは崩れ去っていった。このヒッピーとLSDとの因果関係はとても興味深く感じた。彼らにとって、ドラッグとはどういったものだったのだろうか。彼らにとってLSDとはお互いを結ぶ糸のようなものであったと私は考える。そして、その糸がひとつび絡まれば、ほどくことができなくなってしまう状況に陥ってしまう。それが『ヒッピー』の最後であったのではないかと思った。



「ビー＝イン」のポスター
馬の背にまたがった平原インディアンがエレキ・ギターをかかえている

参考文献

- ・『ACID DREAMS—CIA、LSD、ヒッピー革命』第三書館 1992
Martin A Lee and Bruce Shlain、訳：越智道雄
 - ・『ロック・ミュージックの歴史（上）スタイル&アーティスト』音楽之友社 1996
Katherine Charlton、訳：佐藤 実
 - ・*American Odyssey*
Macmillan / McGraw-Hill New York 1993
- (アメリカ研究A レポート指導教員 松崎洋子)

